
ケイタイデンワ

詩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケイタイデンワ

【Nコード】

N3831A

【作者名】

詩斗

【あらすじ】

テスト前日。今ではもうあまり話さなくなった幼馴染とメールのやり取りがはじまった。

ルルルルル――。

「あ、メール」

今だブルブルと震え続ける充電器に立てていた携帯を手にとった。折りたたみ式の携帯をぱかっと開けるとメールが1通受信された。

「誰かな、こんな夜遅くに」

時刻は夜中の2時ちよつと過ぎだ。

電話じゃないだけマシだけど、常識ではある。

この時間に起きてる自分も自分だけど、そこに突っ込まないで。いくつかのボタンで携帯を操作し、受信したメールを見てみたら。

――送信者、修一ですか。

修一とは、生まれたときから一緒にいる幼馴染というやつだ。

小さい頃はそれこそ双子みたいにずっと一緒にいたけど、成長するにつれてあんまり一緒にいなくなった。

あれだね、避けられはじめたっていうか。

男女の友情って難しいところがあるんだろうな。

中学校に入ってから態度がよそよしくなつて、今では必要最低のこと以外話したりもしない。

こうやって携帯の番号もメールアドレスも知ってるけど、使われることはあまりない。

そんな修一がメール。珍しいじゃないか。

「さては、なんかあったな」

彼女とうまくいってない、そういう噂が最近流れてる。

だからすぐにピンときた。きっと彼女についての相談に間違いない……！

試験勉強も一段落したところだから、相談に乗ってやろうと本文

を見た。

送信：修一

件名：草子へ

本文：寝れない。相手しろ。

こいつは人のことをからかっているんだろうか。

勉強で疲れた頭に鞭打って、親身になって、相談に乗ってやろう
と思ったのに！

だけど修一の性格を考えれば、あのチャラ男のことだ、ありえない
ことはない。

無意識に身構えていた体からふっと力が抜けた。あーも、馬鹿馬
鹿しい。

返信しないのは主義に反するから、一応返信だけしておくけど。

宛先：修一

件名：(no title)

本文：寝れないなら勉強しなさい。今日からテストでしょ。

家も隣同士じゃないけど同じ通りにあるもんだから、もちろん同
じ学校に行ってる。

私が今日からテストだということはもちろん修一もテストだとい

うこと。

こんな時間に起きてるんだから勉強はしてるんだろうけど、大丈夫なのかな。

さて、と。

返信もしたことですし、私はそろそろ寝ようかな。

机の上を片付けて、学校行くための準備をする。

筆記用具とノートと教科書とを鞆にしまつて、と。

ルルルルル――。

教科書とノートを揃えたところでまた携帯のメール受信音がした。

「今度は誰よ？」

ひとまず準備をほっぽって携帯を開いた。

何度かボタンを押して携帯を操作すると、またも修一からのメールが来ていた。

「よっぽど暇なんだなー、修一のやつ」

テストについての質問とかなら答えようと思って中身を見た。

送信：修一

件名：コラッ

本文：件名を（no title）にするなオンナノコだろう！

かつちーん。

どんなメールを打とうと修一に注意される謂れはない！

宛先：修一

件名：(no title)

本文：ほっとけ！ こっちのが楽なの！

なんでメールの打ち方を注意されなきゃいけないの！

しかもこんな夜中にさ。

つか女の子だと件名に文字を打ち込まなきゃいけないわけ？

それは修一の価値観つてもので、私の価値観じゃないでしょうが全く。

あーやだやだ。人に押し付けるタイプの人間。

ルルルルル――。

……多分相手は修一だ。

だけど、もう学校行く準備は出来たし、あとはベッドに入って眠るだけ。

返信しないのは主義に反する……けど。

「このまま返信してたら寝れるもんも寝れないわね」

携帯は目覚まし設定をしているからそのままに、無視して寝てやることにした。

朝。気持ちのいい朝だ。

うーん、天気もいいし、ぽかぽかしてるし、これでテストがなければ最高なんだけだな。

3時間程度しか寝れていないけれど、うまく睡眠のリズムが取れたんだろう。

寝起きもすっきりしているし、これだとテストはまあまあの出来になる気がする。

顔洗って、着替えて、朝ご飯を食べて、歯磨きをして。

今日はいつもよりも少し、早めに家をでた。

家のドアを閉めて数歩、通りに出ると。

「よお」

突然頭上から降り注いだ声に思わず勢いをつけて振り返る。

そして啞然としてしまった。

「しゅ、修一、あんたこんなところでなにやってんの？」

「なにやってんのって、草子が返信してくれないから待ち伏せてみた」

「いや普通に考えて。あのまま応酬しても意味がなかったって」

「必ず返信する主義の草子が返信しないんだ。気になるでしょ」

「時間帯考えなさい。普通寝てるでしょ」

「……最初の2通は返信があつたのになー」

「……眠くなつたのよ」

「あ、そ。じゃあ最終メールはまだ読んでないんだ？」

いわれて気付く、そういうえば最後のメール、まだ読んでいなかった。

慌てて携帯を制服のポケットから取り出して本文を見た。

送信：修一

件名：あのねえ

本文：楽でも件名に文字をいれることで相手にメールを読みたいって気持ちにさせるの！

今度から入れなさい。

「あああなんでそんな早足になつてんだよ！」

「お前は私を怒らせたのかそうかそうなんだなあばよっ」

「こら、女の子がそんな口の利き方しないの！」

「なんでそんなこと指図されなきゃいかんのだっ」

「え？ いや女の子なら可愛い言葉使ってくれた方が萌えるし」

「……さようなら修一、地獄に落ちていらっしやい」

とまあ修一を地に静めたところで時間を確認した。

あ、やばい。もうすぐチャイム鳴っちゃうじゃん！

「じゃあね修一また明日っ」

倒れふす修一をその場に残して、目の前に迫った学校の門まで走る。

ぎりぎり滑り込んだところで門の閉まる音がする。

あー危なかった。遅刻するところだったじゃないの。

私は門の外で叫んでいる生徒たちを一瞥し、足早に教室に駆け込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3831a/>

ケイタイデンワ

2010年10月8日15時07分発行